



筑前國産物帳 「元文3 (1738) 年 完成」 西日本新聞社 昭和50年6月発行

能古島周辺の貝るい達(2) 泊 秀治

波に揺られて合寄る貝類

恵まれた海洋資源の博多湾であつても、能古は島であり、湾奥にあるので資源は限られてくる。沿岸漁業で家族単位の漁法である。昔から玄界灘でとれる魚貝類は美味だといわれているが昔の博多湾・玄界灘では、どのようなものがとれていたのだろうか。

◆筑前國産物帳

享保十九(一七三四)年、幕命を受けた筑前藩主黒田継高が竹田定之進と小野玄林に藩の産物について調査報告を命じ四年後の元文三(一七三八)年に完成した筑前国の博物誌といえる資料である。全六冊からなりその中の筑前國産物繪圖帳には貝類の彩色絵図も載っている。この絵図帳は二百数十年前にまとめられたものであり、現在の専門の見地からしての種類査定など不可能な場合が多いが一方では断片的ながら、今日においても有意義な示唆を与える記述も多く、これらについての解説を今日の見地から内田恵太郎先生がなさっておられるので、一部を御紹介させていただきます。

() は現在名

- はまぐり (ハマグリ) 大小あり志摩郡野北浦より出る者を野北はまぐりといふ甚大にして味美なり 志うとうがひ (ヨメガカサ科の種) 志々み (シジミ) あさり (アサリ) たつかひともいふ たこふね (タコブネ) たこがひともいふ いがひ (イガヒ) 志ほふきがひ (シオフキ) ほたてがひ (イタヤガイ) 志やくしがひともいふ あかがひ (アカガイ) 極てまれなり いしわりがひ (イシマテ) たいらぎ (タイラギ) あハび (アワビ) まあハび (クロアワビ) またか (マタカアワビ) めひら (メカイアワビ) とこぶし (トコブシ) うへじともいふ 至てちいさきあハびなり よめがさら (ヨメガカサ) おにがぜ (ムラサキウニ) うにともたハラがひともいふ うはがぜ (バフンウニ) こまがぜともいふ まて (マテガイ) かき (マガキ) かきびしともいふ おきがき (イワガキ) ころびがき大がきまがりともいふ 志ぬ (カメノテ) かねのて又せいともいふ にし (ニシは数種の巻貝の総称) あかにし (アカニシ) ばい (バイ) 子やすがひ (コヤスカイまたはタカ

ラガイ) 螺様のものなり かうかひ
 (テングニシ) ながびなどといふ
 つべた(ツメタガイ) ささひ(サ
 ザエ) さんせうがひ(サンシヨウ
 ガイ) がうな(ヤドカリ) やどか
 りともいふ よめのかさ(ヨメガカ
 サ) 是をもよめがさらともいふ
 つらがひ(ウズラガイ) ふせ(フ
 ジツポ) こしきともいふ たこのま
 くら(タコノマクラ) 食品にあらず
 川びな(カワニナ) 川にあり たに
 し(タニシ) 田にあり

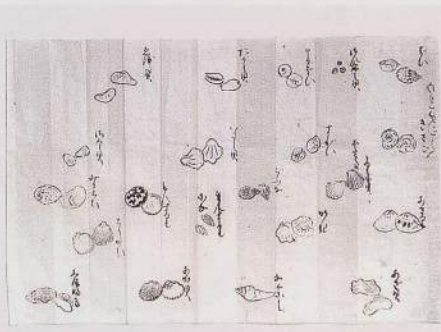
◆筑前國續風土記附録(下巻)

天明四(一七八四)年、福岡藩
 士加藤一純が藩命をうけ鷹取周成ら
 の助録を得て四十巻を藩に献上、一
 純の没後鷹取が青柳種信の助録を得
 て不足の八巻を補う。村名を記しそ
 の産土神から始め「神詞・仏堂・名
 所・陳跡・山川・原野」から「鳥
 獸・虫魚」にまで及んでいる。むろ
 ん貝類も含まれており、一部を紹介
 する。

介蟲類

蛭 鐘崎・大嶋・弘浦に潛女ありて
 多く取る。弘浦にて蛭の藻焼と云
 ものを製す。唯一人有。秘して他
 人に傳へず。野北、唐泊の海底に
 も、大なる蛭多しといふ

蛭 鐘崎・大嶋にて夏月に製す
 野北大蛤―志摩郡今津浦の内、大



佐治家文書「献上貝の図」松崎文書館所蔵

原の内にも大なる貝あり
 蛭―中春の比より箱崎の斥地・福岡
 の海汀・伊崎邊にも多けれど小

馬刀・榮螺―志摩郡玄界嶋野北・唐
 泊・宗像郡地嶋・大嶋等に多し
 蛭―糟屋郡箱崎海所、志摩郡邊田浦
 等に多し
 蛭 此の貝東都にてはざるぼうと云
 たいらぎ―遠賀郡若松浦にあり残嶋
 の産に勝れり。志摩郡今出村新
 日の邊潮人にも生ず。又早良郡
 姪濱村の民此所を涉り。足を損
 してより始て此貝有事を知れり
 うつら貝―此貝四月に多くとる。大
 蛤に似て別種也。

蛭―今箱崎の海中に多からず。香椎
 潟・名嶋・志賀嶋・宇久嶋の海
 中に多し。冬より春の間、箱崎
 の漁父これをとりにて販く。唐泊
 の海中今は稀なり。遠賀郡本城
 潟に多し。極めて大きく味よし。

櫻貝―遠賀郡蘆屋の海邊嶋郷の
 海邊にもあり。
 さんしやつ貝―那珂郡弘浦に有。
 あさり貝―早良郡残嶋に多し。名
 産也。箱崎の漁父府下に販くは
 あさり貝にあらず。涙あざりと
 云。蛭の種類なり。

◆佐治家文書
 津屋崎町の旧家「佐治家」には
 寛政十二(二八〇〇)年、津屋崎の
 浜に遊びにきた六歳の黒田の殿様に
 贈った貝の標本の記録「献上貝の図」
 (和紙三枚)が残っている。

あざり(アサリ) や加起(カキ)、あ
 か貝(アカガイ)、さくら貝(サクラ
 ガイ)、志ほふきがひ(シオフキ)、
 だい(かひ)、きさこ(キサゴ)、た
 から貝(メダカラガイ)、ゑぼし貝
 いたや貝(イタヤガイ)、あざ貝(ア
 シノハガイ)などが載っている。
 博多湾や玄界灘では昔から豊かな
 海を利用して貝類が食糧の一部とし
 て採集されていたことがよくわかる。

(次号へ続く)

事務局だより

今年の台風で館庭の樹木が初
 めて倒れました。切り詰め植え直
 した為今まで見上げていた木は、
 極端に短くて太い幹と、わずかな
 葉しか残っていませんが元気に頑
 張っています。毎年五月の終り頃
 になると黄色に色づいてゆく実と
 深い緑色をした葉の色あいが美し
 く、館を訪れる人から「もう食べ
 られる?」「もらったいい?」と
 尋ねられていた枇杷の木です。実
 は熟れる直前にカラスが飛んで来
 て、あつという間にそのお腹の中
 へ…。もちろん職員のお口へは入
 りません。これからしばらくの間は
 カラスもおアスケです。この枇杷
 や甘夏柑で有名な能古島にとつ
 て、今年の遅い台風は多くの樹木
 を倒して通り過ぎました。一年を
 通しての作業を締めくくる収穫の
 喜びは来年か、もっともつと先に
 なるものもあります。島の人達は
 黙々と身体を動かして働いていま
 す。とても辛抱強いのです。
 当館はもうすぐ冬季休館(十
 二月〜二月末迄)に入ります。館
 での仕事は外作業が主になります。
 す。暖かな日は嬉しい。でも自然
 と直接向きあつて仕事をしている
 人達の事を考えると、どうぞ冬は
 冬らしく…と願います。

会員寄稿

福岡湊町加瀬家と姪浜石橋家の関係

友の会会員 石橋 善弘

福岡湊町加瀬家については、すでに多くの研究がなされ、江戸時代の福岡を代表する大商家であることはよく知られている。最近ある偶然の機会から、加瀬家と姪浜石橋家の関係について、新たな知見が得られたので記しておきたい。

加瀬家初代とされる嘉兵衛元長（一七三二（享保一七）年卒、享年八十三才）は長男嘉六を分家させ、長女ハルに姪浜石橋家から嘉兵衛元忠を養子に迎えた。この縁組みは、後の酒造御免札の譲渡や醸造技術の取得等と関連しているようである。実際、加瀬家はこの縁組みの前、元長二十三才の一六七二（寛文二二）年に酒造業をはじめ、一七三七（元文二）年には湊町の居宅、酒蔵等を石橋孫兵衛より買い取ったとされている。このことから、縁組みはハルが二十才前後、元長が四十代中頃と仮定すると、一六九〇年ごろのことと推定さ

れる。居宅等の買い取りは、元長の没後、元忠の代になってからである。

分家した嘉六は妻を、これも石橋家から迎えていることが最近判った。つまり、嘉兵衛元長の子供は二人とも配偶者を石橋家から得ており、加瀬家と石橋家との間には（これらの縁組みによつて深い関係ができたというよりも）当時すでに相当の姻戚関係があったことが想像できる。そうでもない限り、このような二重の縁組みは不可能と考えるのが自然ではないだろうか。

さて、養子になった元忠であるが、これは姪浜北小路（現在の姪浜、三丁目あたり）石橋徳兵衛の子である。また、姪浜白毫寺の過去帳によると嘉六の妻は、姪浜北小路の石橋太右衛門の娘で、一七三四（享保一九）年十二月十九日に亡くなっており、戒名を善室妙因信女といい、同

寺祠堂に葬られている（祠堂の場所は現在不明）。

ここで、嘉六の妻（石橋太右衛門の娘）の没年が元長のその直後であること、婚家ではなく実家の菩提寺に葬られている

ことは注目に値する。想像ではあるが、分家した嘉六は病弱だったのではないか、またそれが分家の理由ではないだろうか。そして、すでに夫を亡くしていた分家の嫁である嘉六の妻から

加瀬屋 近世中・後期（江戸時代）福岡市湊町で、酒造業、質屋業、隠岐国問屋を営むとともに、福岡藩・秋月藩銀主、御家中御世帯請持銀主も。格式町屋。

特に御家中御世帯請持銀主は黒田藩の武士に知行俸禄米を担保とした商人で、金融の外に、藩からの蔵米受取りの手続きや保管、売却して銀に換える業務で、江戸の札差にあたる。藩との密接な関係なしには成り立たない。

初代は早良曲淵の出。二代目は姪浜石橋家より養子。九代で鹿藩置県を迎えた。福岡年行司を勤めた福岡（博多ではない）の代表的な商家。

姪浜石橋家 姪浜には石橋を

名乗る各家がある。能古にも石橋姓がある。言い伝えでは共に早良曲淵の同流れという。姪浜石橋各家のうち、著名なのは石橋善三郎家である。姪浜旦過（六丁目一番）において酒造業を営む。二代善三郎が同姓孫兵衛より、酒造株と家屋敷、酒蔵を譲り受ける。七代で明治を迎える。幕末の嘉永—安政年間。室見川の架橋に功績あり、藩から二十人扶持という、破格の待遇をうけた。

なお、石橋孫兵衛は福岡湊町にあった酒造業を加瀬屋に譲渡している。二カ所に酒造場を経営していたわけ、当時の姪浜商人の存在力を窺わしめる。

（文 早船正志）

みれば、義父の没後、加瀬本家は新しい戸主の代になって、実家の墓に葬られたのではないだろうか。

つぎに、酒造御免札を譲渡したとされる石橋孫兵衛であるが、四人の子に生まれたにもかかわらず妻子に先立たれたという証拠がある。この証拠というのは、石橋善三郎家系で毎年作成してきた年回誌であり、それによると概ね(西暦年は筆者追記)

洞岩了廊信士

宝暦六子十月二十八日
旧地主石橋孫兵衛

柏院妙樹信女

延享三寅七月二十六日
(孫兵衛妻)

恕林明善信士

宝暦五亥四月十三日
(孫兵衛子)

幼也童女

貞享二丑七月五日
(孫兵衛女子)

姉空童女

貞享四年
(孫兵衛女子)

如影童女

元禄七戌午十月十三日
(孫兵衛女子)

一六八七

石橋本家の旧地主にて興徳寺に墓地あり

となつてゐる。これから、孫兵衛が妻子に先立たれ、最後に没していることがわかる。したがって、孫兵衛の家系はそれで途絶えたのであるが、その姪浜巨過(現在の姪浜六丁目あたり)の土地屋敷を受継いだのは石橋善三郎で、早良郡史(福岡市図書館蔵)によると、一七五四(宝暦四)年(孫兵衛の生前であることに注意)に酒造業を開始している(銘柄「菊水」)。この酒造業は、善三郎の子孫によって受継がれ、石橋善次郎が一九三二(昭和七)年十二月廃業するまで五代、約一八〇年間続いている。最後に、未解決の問題(いず

能古博物館協賛会・友の会

〔法人協賛会員〕

- 浄土真宗本願寺派浄満寺(原土井病院)
ワタキョーセイモア(株)
福岡メテイカルリ
アールアンドエム
サールビス
福岡校坂郵便局
鬼敷信孝
福岡赤坂郵便局
戸田正義
日清医療食品(株)
福岡支店
福岡経営管理センター
(株)サンコー
(株)恵光会原病院
(株)西日本シティ銀行 和白支店
(株)西日本シティ銀行 千代町支店
(株)西日本シティ銀行 香椎支店
(株)西日本シティ銀行 土井支店
(株)西日本シティ銀行 福岡流通センター支店
(株)西日本シティ銀行 新宮支店
(株)西日本シティ銀行 箱崎支店
(株)西日本シティ銀行 久山支店
(株)サンネット
(株)福砂屋
(株)笠松会有吉病院
(株)ウエダ建築社
九州防災工業(株)
(株)西部エレベーターサービス
(株)豊友設備
総合産業(株)
(株)ニッココトラス
(株)メイトン
(株)アイアド(株)
(株)ホスピカ
ギヤラリー倉
(株)大兼会福岡原リハビリテーション病院
(株)江頭会さくら病院
(株)ニチロ九州支社
宗教法人善隣教
(株)橋本組
(株)精工本組
(株)下山工業(株)
(株)学友会
(株)唐人町ブラス甘菜館
(株)大和産業(株)福岡支店
(株)社会福祉法人福岡ひまわりの里
大成印刷(株)
(株)ホームケアサービス
(株)能古映画サークル
(株)岩室商会
特別養護老人ホーム なごみの里
(株)エムサービス(株)
(株)センタービジネス(株)
(株)トータル・サポート・コーポレーション

(敬称略・順不同)

〔協賛会員〕

- 松本盛二
南 誠次郎
中山 重夫
菅 直登
早船 正夫
奥村 直夫
笠井 徳三
安昭 光正
亀井 准輔
熊谷 雅子
石橋 親一
木原 敬吉
坂田 貞吉
庄野 國彦
原田 國雄
森光 英子
永井 功
緒方 健
浦上 健
山本 稔
田中 貞輝
武内 隆泰
白水 義晴
石野 智恵子
翠川 文子
多々羅節子
熊谷 豪三
有江 勉
山崎 拓
七熊 太郎
西宮 代松
片桐 寛子
西村 俊隆
明石 散人
矢部 俊幸
上原 孝正
早船 真一
吉島 志之
川島 貞雄
土生 信子
立石 武泰
伊藤 茂
水田 和夫
木戸 龍一
岡部六弥
星野万里子
吉村 雪江
安松 勇一
上田 良一
高田 浩二
桑野 次男
藤木 充子
和田 宏子
行成 静子
石川 文之
都筑 久馬
宮崎 智一
古賀 清子
西 政憲
岡本 金蔵
三宅 金子
星野 君子
林 十九楼
宮 徹男
安永 友儀
織田喜代治
上田 博
鶴田スミ子
塚本美和子
伊藤 康彦
寺岡 秀實
原田 種美
奥田 稔
石橋 清助
井上 敏枝
隈丸 清次
吉島とよ代
大山 宇一
葉山 政治
川島 貞雄
神崎憲五郎
久芳 正隆
半田 耕典
武藤 瑞
莊山 雅敏
永田 洋一
永岡喜代太
神戸 純子
渡辺美津子
佐藤 博子
山田 静三
前田 静子
飯田 晃
神戸 聡
吉田 朝男
吉田 一郎
池田 修三
岩谷 正子
小川 正幸
権藤 菊朗
増田 義哉
宮嶋熊太郎
土井 千草
松坂 洋昌
福永 実
鹿毛 博通
古川 映子
松井 俊規
伊藤 泰輔
西村 達頭
執行 敏彦
渡辺千代子
脇山 和子
脇山 清一
川浪由紀子
川田 啓治
足達 輔治
中村 達之
古賀 謙二
野尻 敬子
大野 幸治
柳田 正己
神崎憲五郎

関 敏巳様
花の苗をたくさんいただきました。
ありがとうございます。

れも石橋孫兵衛に関するものであるが、をいくつか指摘してこう。第一は、孫兵衛の父、祖父が誰かということである。姪浜興徳寺の墓の様子からみて、孫兵衛は長男ではなさそうであるが、そのことが家系を辿ることを困難にしているようである。第二は、孫兵衛の生年、あるいは亡くなった年令である。年回誌によると、最初に子供をなくしたのが一六八五年で、このときの孫兵衛の年令を二十代はじめと仮定すると、それから七十年余り、九十才前後まで生きたことになる。この推測が正しいれば、孫兵衛は七十才前後で酒造御免札を加瀬家に譲ったことになる。孫兵衛の生年を特定することは、孫兵衛が湊町の土地屋敷や酒造御免札をいつ取得したのか、あるいは親から相続したのかどうかなどを推測する上で重要である。第三は、石橋善三郎が、いつ、いかなるかたちで孫兵衛の土地屋敷を受継いだのか、また、孫兵衛が経営していた酒造業と善三郎が一七五四(宝歴四)年にははじめた酒造業の間に時期的な空白があるの

かないのかという問題である。これらのことが明らかになれば、さらに時代を遡って加瀬家と石橋家の関係が明らかになることが期待できる。

筆者は歴史を専門に勉強している者ではないが、最近得た知見を記録に残す必要性を感じ、記録にある事柄を中心に、それから想像、推測されることをまじえて記した次第である。本稿の執筆にあたっては、加瀬家の流れをくむ松井俊規氏(福岡市中央区在住)および姪浜の歴史に詳しい早船正夫氏(福岡市西区在住)にいろいろご教示いただいた。また過去帳の閲覧について、白毫寺・川端洪山住職にお世話になった。これらの方々に感謝の意を表わす。

矢野鈴子

第2回絵はがき教室

クリスマス 年賀状等
早くて簡単な絵はがき

日時：11月27日(土)

13：30～

定員：28名まで

申込先：能古博物館

092(883)2887

- | | | | |
|--|--|--|--|
| 原杉原原小原白土田井林古賀伊藤鹿野關所住村山野崎住本中野杉浦松田辻本大塚濱北鳥田甲本鋤田豊島市丸西古吉山小山山崎鬼丸宮内佐野金子 | みどり 康二 堀百合子 礼子 京子 中寛治 屋伊藤雄 上雷策 正孝 朝生 光生 英邦 直之 山直之 前田敏也 逸郎 英彦 晶子 五郎 清 雅史 博久 哲郎 政宏 裕美子 博久 雅史 五郎 清 雅史 博久 哲郎 政宏 裕美子 博久 雅史 五郎 清 雅史 博久 哲郎 政宏 裕美子 | 山下清久 杉原正毅 大久保昇 党昌弘 福澤隆雄 小嶋幸雄 福本孝行 樋口陽一 木下勤 酒井カツヨ 島義博 田上孝信 中畑紀子 西島道子 西嶋洋子 村上靖朝 嶽村魁 野原健次 鈴木惠津子 富永紗智子 吉村陽子 松本雄一 石橋善弘 徳重認 岩淵謙治 岸本雄二 武田正勝 武田初代子 近藤雄文 西嶋克司 榊島政信 上杉和稔 富田英寿 野上哲子 益田天嶽 小山正文 石橋正治 龜石正之 藤田一枝 松尾清美 森祐行 | 吉安啓子 村上修 阿部昌弘 小谷修一 結城昌進 永石順洋 重松史郎 藤吉マツエ 岸川龍 山本光玄 吉開史朗 田中靖高 香立スミエ 藤瀬三枝子 野見山実 頃末隆英 友原静生 山本信行 聖安和堂診所 井澤健 寿美電気 矢野鈴子 藤崎和子 宮崎正直 原田雄平 山本勲 高根幸子 谷田優美 柴田澄江 横田武子 石橋順子 西原友彦 小川友彦 木血敦代 矢野義憲 丸山敏子 |
|--|--|--|--|

●能古博物館ご案内●

開館 9：30～17：00 (入館16：30まで)
 休館日 12月1日～2月末日の冬季のみ休館
 入館料 大人400円・高校生以下無料
 交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
 →能古(徒歩10分)→博物館
 〒819-0012 福岡市西区能古522-2
 ☎(092) 883-2887
 FAX(092) 883-2881

ホームページ <http://www.nokonet.com/museum>
 メールアドレス museum@nokonet.com

能古博物館の会

※新規の御加入(先号以後、平成十六年十一月十日現在)を、記載いたしておりますので、何卒ご芳名をご確認ください。ありがとうございます。

協賛会(個人年間1万円(何口でも可))
 "(法人)年間3万円(何口でも可)
 友の会 年間3千円(何口でも可)
 (館の活動、館誌購読と催事企画に参加)
 館維持、資料収集、施設整備等の
 資金援助を受ける
 納入方法 郵便振替 01730960970
 財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。

第7回 能古の風フォトコンクール

入賞者発表

準グランプリ賞



「能古冬景色」 中山 隆史氏

グランプリ賞



「おじいちゃんと鯉」 瀬野 雄市氏

特別賞



「風にゆらいで」 中田 長之氏

能古島賞

第7回 能古の風フォトコンクール 入賞者

グランプリ賞	五万円	瀬野 雄市 様	福岡市博多区博多駅南
準グランプリ賞	三万円	中山 隆史 様	福岡市南区井尻
特別賞	二万円	中田 長之 様	福岡市早良区原
能古島賞	一万円	ふじよしまつえ様	福岡市中央区小笹
入選	一万円	小川 誠 様	福岡市南区長住
入選	一万円	笠村 悠紀 様	北九州市門司区藤松
入選	一万円	高鷹 春一 様	福岡市早良区小田部
入選	一万円	高浪 まさえ様	筑紫野市桜台
入選	一万円	友野美保子様	八女郡上陽町
入選	一万円	瀧野 香鶴 様	福岡市南区大楠

能古島賞



「うれしい主役」 ふじよしまつえ氏

第7回能古の風フォトコンクールも皆様のおかげで無事終了致しました。有難うございます。今回の応募総数は124点でした。応募者全員の作品を11月30日迄展示致しております。どうぞ御覧下さい。来年のことを話すと鬼が笑うと言いますが第8回能古の風フォトコンクール(平成17年9月30日消印有効)への御応募、お待ち致しております。